論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　牧　千夏

論　文　題　目

近代日本における農村地域の文化活動
――宮沢賢治を中心に――

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	飯田　祐子
委員	名古屋大学教授	日比　嘉高
委員	名古屋大学准教授	大井田　晴彦
委員	名古屋大学准教授	河西　秀哉
委員	文教大学教授	大島　丈志

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

〔本論文の概要〕

本論文は、近代日本の農村における中央の思潮の受容の様態や、独自の文化活動を、生前には岩手花巻で活動するアマチュア作家の一人であった宮沢賢治を一例として、分析したものである。近代における中央文壇、またそれを対象とする近代文学研究において、農村や農民という問題は周縁化されてきたため未検討の課題も多く、またその独自性は十分に明らかにされていない。本論では、宮沢賢治に焦点を絞り、農村における文化状況を明らかにした。本論文は、宮沢賢治の農民芸術論に着目した第１部と、産業組合に着目した第２部で構成される。

第１部では、宮沢賢治が花巻農学校・岩手県国民高等学校・私塾の羅須地人協会で行った講義をもとに執筆した「農民芸術概論綱要」について検討した。第１章・第２章では、教育活動の面から考察した。第１章では、宮沢賢治および宮沢の講義の受講生が、ともに経済的・教育的に上層に属していることを確認した。先行研究で両者の懸隔が指摘されてきたことを見直し、宮沢賢治を一アマチュア作家として、同時代の地域の文化状況のなかで理解することの妥当性を示した。第２章では、1920 年代の岩手の教育機関では個性の尊重に重点を置いた「新教育運動」が高まりをみせていたことを明らかにし、宮沢賢治の農民芸術論との共通点を指摘した。第３章から第５章では、宮沢賢治の農民文学論を、同時代の農民文学論争のなかで検討した。第３章で、1920 年代における農民文学論争全体の議論や流派の流れを整理し、見取り図を作成した。そのうえで、第４章では「農民芸術概論綱要」における議論が、複数の対立的な議論を組み込んだものであることを指摘し、中央文壇の見取り図の一箇所に単純に位置づけることができないという点に、地方における中央文壇の動向の受容と、独自の文学活動の特徴を見出した。第５章では、宮沢賢治の農民文学論の文学的実践として『春と修羅　第三集』をとりあげ、農業に関する気象学に着想を得た比喩を抽出し、農業技師でもあった宮沢賢治の詩法として論じた。

第２部では、農民文学論の作品における実践を検討する重要な観点として「産業組合」に着目した。第６章で、産業組合における思想的・文化的展開について分析し、先行研究では国家主義の一部に位置付けられてきた産業組合主義が、1920 年代には多様な展開を遂げていたことを明らかにした。第７章では、産業組合の宣伝事業の一環として創刊された『家の光』と宮沢賢治「ポラーノの広場」との共通性を指摘し、国家主義とは異なる地方志向の農本主義の展開を論じた。第８章ではさらに、産業組合に関わった賀川豊彦、平塚らいてうを分析対象に加え、賀川のキリスト教、平塚の母性主義、宮沢の生命思想・法華経など、それぞれの思想的基盤は異なりながらも、産業組合の“協同”の思想への共感という点で共通性があることを指摘した。第９章では、詩「産業組合青年会」が、地域の状況を反映していることを指摘し、地方詩壇の地域志向性に通じる詩作として位置づけた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

〔本論文の評価〕

本論文は、宮沢賢治を農村地域における青年知識人の一人ととらえ、その文化活動の特徴を調査分析したものである。宮沢賢治は詩人・作家であるだけでなく、農学校教師として農業研究をも行っている。農業思想やそれと文学活動との関連についての先行研究はすでにあるが、本論文は、同時代の地域の状況と詳しく照らし合わせて、農村における文化活動の一例として考察した。文学のみならず歴史学や社会経済史などの先行研究を広く渉猟したうえで独自の調査を行い、学際的な研究成果となっている。とくに評価されたのは、以下の二点である。

第一は、近代文学研究における中央文壇中心的な研究状況を見直し、新たな評価の視座を提示している点である。本論文が、周縁におかれてきた問題群として農民文学や農村の文化活動に着目し、宮沢賢治研究をそこに接続した点は、独創的な切り口となっている。また 1990 年代以降に展開してきたポストコロニアリズムの立場による研究が、農民文学や宮沢賢治文学について、中央の思潮に直結する帝国主義および全体主義的側面を見出し批判してきたことをふまえつつも、個と国家の間の水準として、地方における独自の文脈を抽出することで、国家を直接志向するのとは異なる思想や文化実践があったことを論じた。

第二は、その論証において、多様な一次資料を調査し、農村や地方における文化活動の様相を具体的に浮かび上がらせた点である。第 1 部では、宮沢賢治の農民芸術論を岩手における新教育活動との関わりから再読し、また 1920 年代の農民文学論争の地方における多重的な受容を、宮沢賢治を例として分析した。第 2 部の産業組合についての調査分析は、とくに注目に値する。先行研究では、産業組合が経済更生活動として国家主義の一部に位置づけられてきたことに対し、本論文では思想的文化的展開に目を向け、1920 年代には地域における階級協調的な“協同”の理念が様々な文化イベントを通じて広げられていたこと、それが 1930 年代に国家主義へと統合されていくことを指摘した。また、宮沢賢治をはじめとする、産業組合と関わりのあった文学者の動向を分析した。これらの分析は、文学研究のみならず思想史の領域にも貢献する成果として高く評価された。

問題点として、宮沢賢治については、東京生活も経験するなど農村の作家と言い切れない側面もあり、より精密な検討が必要であるということや、取り上げられた文学作品数が少なく、文学作品の分析としては不足な面があり、宮沢賢治文学固有の特質が十分に示されていないこと、産業組合については、他の組織との関係もふまえた検討が必要なことなどが指摘された。ただし、それらの論点は、申請者が今後の研究において検討すべき課題といえ、決して本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。